

北海道根室市

にしつき が おかたてあなぐん
西月ヶ岡竪穴群

令和6（2024）年

根室市教育委員会



1 遺跡遠景 北西から 手前の道路は国道 44 号線 奥は太平洋



2 遺跡遠景 南から 奥はオホーツク海



1 遺跡周辺の空中写真（1952年10月撮影、白線部分は史跡指定範囲） 国土地理院発行写真を加筆



2 遺跡周辺の空中写真（1978年7月撮影、白線部分は史跡指定範囲） 国土地理院発行写真を加筆

例 言

1. 本書は2023（令和5）年度に根室市教育委員会が実施した、西月ヶ岡竪穴群の詳細分布調査報告書である。
2. 本書の編集、執筆、写真撮影、写真図版作成は歴史と自然の資料館学芸担当の猪熊樹人が行い、社会教育課文化財担当の大久保太智が「2. 遺跡の位置と環境(1)、(2)」を執筆したほか、報告書作成業務を補助した。
3. 遺跡のレーザー計測、測量図、CS立体図の作成は株式会社シン技術コンサルに委託した。
4. 遺物の形状解析図は株式会社ラングに委託し、一部については形状解析図をトレースし図化した。
5. 調査の記録、データ等は根室市教育委員会が保管する。
6. 本調査にあたり下記の機関及び個人から御指導、関連資料調査、文献提供等でご協力を頂いた。
(順不同・敬称略)
文化庁文化財第二課、北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
右代啓視、鈴木琢也、村本周三、澤田恭平、高橋美鈴、林勇介

目次

口 絵
例 言
目 次

1. 調査の概要	
(1) 調査目的	1
(2) 調査要項	1
(3) 調査体制	1
(4) 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の位置と環境	
(1) 遺跡の位置	2
(2) 周辺の遺跡について	2
(3) 遺跡をとりまく経過	5
3. 調査の方法	
(1) 測量調査	6
(2) 過去の調査資料の検討	7
4. 調査の成果	
(1) 測量調査の成果	8
(2) 過去の調査資料	13
5. まとめ	
(1) 遺跡の位置づけ	19
(2) 西月ヶ岡竪穴群の価値	19
(3) レーザー計測による竪穴の把握について	20
(4) 今後の課題	20

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1	西月ヶ岡竪穴群の位置と周辺遺跡分布 3	図7	遺物実測図.....15
図2	西月ヶ岡竪穴群竪穴分布図..... 9	図8	1963年東京教育大学調査竪穴住居跡・・16
図3	段丘名、沢名、過去の調査地点位置図10	図9	1982年根室市教育委員会調査竪穴住居跡17
図4	西月ヶ岡竪穴群のCS立体図.....11	図10	東京教育大学調査7号竪穴出土土器・・18
図5	段丘2の過去の空撮比較.....12	図11	根室市教育委員会調査出土土器.....18
図6	スマートフォンLiDARで計測した竪穴 のくぼみと位置.....12		

表目次

表1	周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧..... 4	表4	発掘竪穴住居跡一覧.....23
表2	標定点の座標値..... 6	表5	土器観察表.....23
表3	史跡西月ヶ岡遺跡の史跡境界杭の座標値 6	表6	石器観察表.....23

写真図版目次

口絵 1		図版 4	
1	遺跡遠景 北西から	1	段丘4竪穴 南から
2	遺跡遠景 南から	2	段丘4竪穴 東から
口絵 2		3	段丘4竪穴 北西から
1	遺跡周辺の空中写真 (1952年撮影)	図版 5	
2	遺跡周辺の空中写真 (1978年撮影)	1	1963年東京教育大学調査7号竪穴出土土 器
図版 1		2	1982年根室市教育委員会調査出土土器
1	段丘1、段丘2 遠景 南東から	図版 6	
2	段丘1、段丘2 遠景 南西から	1	北構保男氏収集資料
図版 2		2	1963年東京教育大学調査7号竪穴出土内 耳土器
1	段丘3、段丘4 遠景 南西から		
2	段丘5 遠景 西から		
図版 3			
1	段丘1竪穴 北東から		
2	段丘2竪穴 北東から		
3	段丘3竪穴 南東から		

1. 調査の概要

(1) 調査目的

本調査は国指定史跡西月ヶ岡遺跡を含む西月ヶ岡竪穴群の保護及び活用を行う上で、竪穴のくぼみの広がりについて測量調査や踏査により把握することを目的に実施した。

(2) 調査要項

調査対象 西月ヶ岡竪穴群（北海道教育委員会登録番号N-01-4）

国指定史跡「西月ヶ岡遺跡」（1976年8月22日指定）を含む

所在地 根室市西浜町3丁目87-4、375-1、

根室市西浜町4丁目136-1、

根室市西浜町6丁目2-3、3-1、4-1、4-2、5-1、5-2、8-1、9、
10-1、11の一部

対象面積 約213,300㎡

調査期間 2023年4月4日～2023年12月27日

(3) 調査体制

調査主体者 根室市教育委員会

調査事務局 根室市教育委員会社会教育課文化財担当、歴史と自然の資料館

課長（館長） 藤澤 進司

文化財主査 餅崎 幸寛

文化財担当 伊藤 郁

調査担当者 歴史と自然の資料館 学芸主査 猪熊 樹人

社会教育課文化財担当 学芸員 大久保太智

(4) 調査に至る経緯

市内において再生可能エネルギー発電所建設等による開発が増加していることから、国指定史跡西月ヶ岡遺跡を含む埋蔵文化財包蔵地についてその広がりを把握し、遺跡の内容や価値をまとめ、今後の保護措置や活用に資する目的で本調査を実施した。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置

西月ヶ岡竪穴群は根室市西浜町3丁目87-4、375-1、西浜町4丁目136-1、西浜町6丁目2-3、3-1、4-1、4-2、5-1、5-2、8-1、9、10-1、11の一部に所在する。根室市は北海道の東端に位置する人口23,006人（令和5年12月現在）の市である。北はオホーツク海、南は太平洋に挟まれ、東西に細長く伸びた半島にあり、行政区域は、西は別海町・浜中町と接し、東は本土最東端の納沙布岬から望むことのできる歯舞群島までとなっており、その面積は506.25km²（うち歯舞群島の面積99.94km²）である。水産業が基幹産業で、夏から秋にかけて水揚げされる花咲蟹やサンマ、サケなどが全国的に知られている。

根室市の年間平均気温は約7℃で、夏には海霧が発生することが多く、冷涼な気候であり、国指定天然記念物「落石岬のサカイツツジ自生地」や「カラフトルリシジミ」といった氷河期の遺存種をはじめ希少な動植物が見られる。また、海霧で涵養され、海岸段丘の傾斜部分や段丘崖を覆うブランケット型泥炭地から成り立つ根室市指定天然記念物「歯舞湿原」をはじめ、希少な湿原が多く見られる。

根室半島の地形の特徴としては、高い山がなく全体的に平坦で海岸段丘が発達している。約13万年前～約33万年前に形成されたという大きく3段からなる段丘面がみられるが、過去の地質調査では、根室市内の海岸段丘を海拔60～80m、40～50m、30～40m、17～25m、10～15mの5つに区分され、段丘間の崖はならされ、なだらかで連続的にみえると指摘されている（湊ほか1975）。西月ヶ岡竪穴群はオホーツク海に流入する第一ホニオイ川右岸の標高10～30mの河岸段丘上に立地する。第一ホニオイ川の河口は、国指定史跡根室半島チャン跡群を構成する、アッケシエト1～3号チャン跡が所在する無名岬の基部でオホーツク海と接続している。この無名岬の西にはシロカラモイ岬が相対して位置し、両岬の間の距離は約1.8kmあり湾を形成している。

西月ヶ岡竪穴群が所在する西浜町は1966年1月の区画改正前まで「字月ヶ岡」の一部であった（根室地名研究会編2015）。「字月ヶ岡」は現在の昭和町、宝林町、月岡町、西浜町を含む広い範囲を指す名称であり、遺跡は月ヶ岡の西端に所在することにちなんで「西月ヶ岡」とされたのではないかと推測する。西月ヶ岡竪穴群の下を流れる第一ホニオイ川は、国土地理院が1952年に発行した二万五千分の一地図「根室南部」において「キナトイシ川」となっている。「キナトイシ」はアイヌ語地名であり、永田方正によると「Kina tuye ushi（キナドイェウシ）」と考えられ、「蒲（ガマ）を切る処」と解釈されている（永田1908）。ガマ科はゴザなどの敷物やムシロを編む材料として利用されており、遺跡下の河川地が生業の場となってきたことを示している。

(2) 周辺の遺跡について（図1、表1）

根室市は北海道内でも遺跡の数が多く、314か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。遺跡が集中する場所は、海跡湖であるトーサムポロ沼、温根沼、風蓮湖の湖岸や別当賀川をはじめとする河岸段丘上であり、オホーツク海岸側に集中する傾向がある。種別は、集落跡が最も多く227か所と約3分の2以上を占めており、遺物包含地、チャン跡、墳墓、貝塚が続く。国指定史跡として西月ヶ岡遺跡と24か所のチャン跡からなる根室半島チャン跡群の2件が指定されている。

西月ヶ岡竪穴群(4)の周辺には51か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。温根沼東岸から西月ヶ岡竪穴群の間の河岸段丘では竪穴群がみられ、穂香川右岸遺跡(296)、穂香竪穴群(34)、幌茂尻1

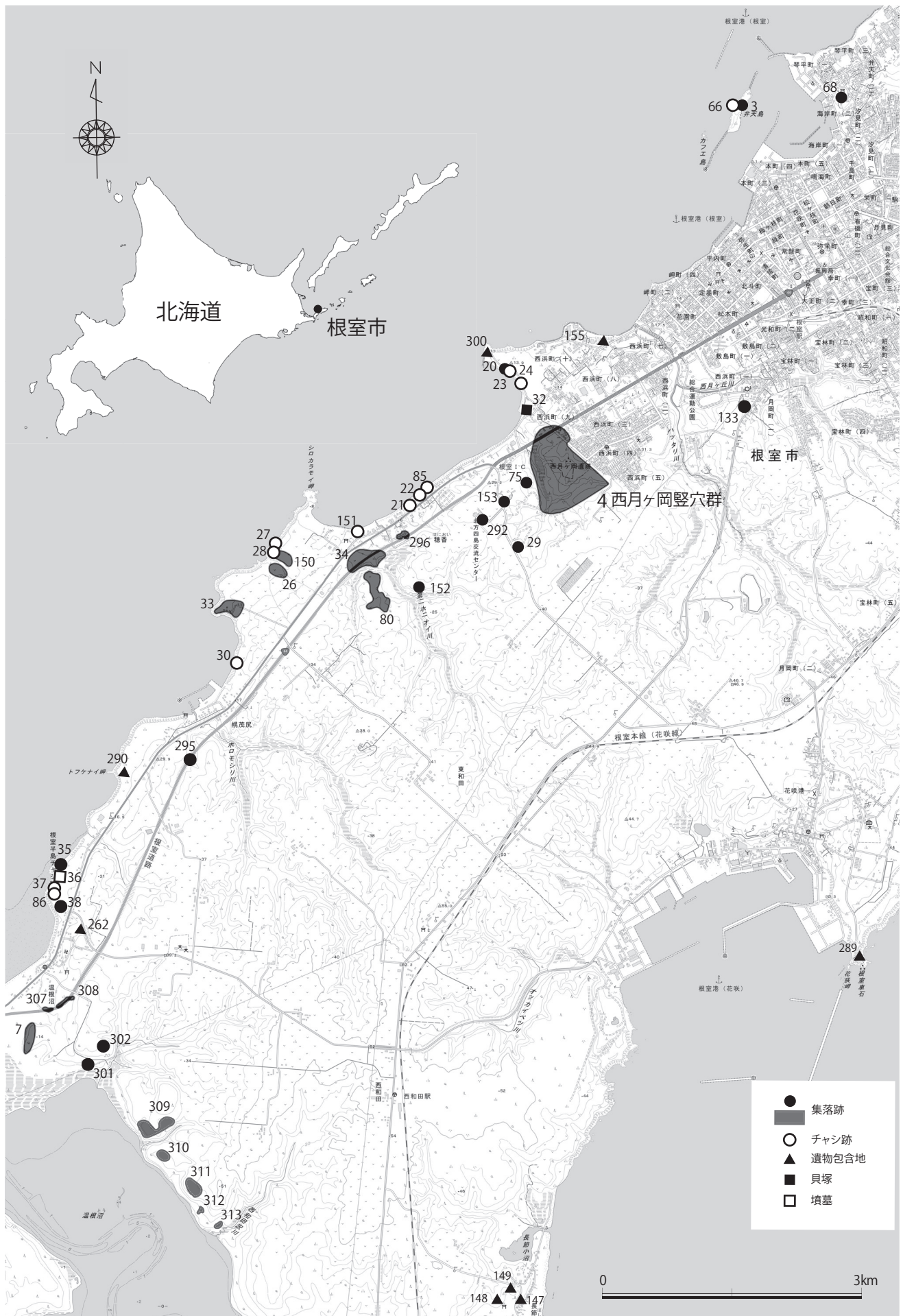


図1 西月ヶ岡竪穴群の位置と周辺遺跡分布

表1 周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧

登録番号	遺跡名	種別	時代時期	所在地	立地	標高	発掘調査	文献	備考
3	弁天島貝塚堅穴群	集落跡	オホーツク	弁天島	弁天島	10m	○	平光1929、八幡編1966、北地文化研究会1969・1974・1979・2009、西本編2003	
4	西月ヶ岡堅穴群	集落跡	縄文	西浜町3-67-4,375-1,4-136-1,6-2-3,3-1-4,1-4-2,5-1,5-2,8-1,9,10-1,11の一部	第一ホニオイ川河岸段丘上	25m	○	奥野1956、八幡編1966、川上ほか編1983、平川ほか編1999	国史跡
7	関江谷1堅穴群	集落跡	縄文・オホーツク・ 縄文・アイヌ	温根沼343-2	温根沼北岸丘陵	12m	○	児玉ほか1956、北地文化研究会1974、猪熊ほか2007、新美ほか2010・2011・2012	
20	キナトイシ堅穴群	集落跡	縄文	西浜町10-91	海岸段丘上	16m		伊藤1935、北地文化研究会1974	
21	ニランケウシ3号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香13-5,7,13-5地先	海岸段丘上	10m		伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
22	ニランケウシ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香7,7地先	海岸段丘上	14m		伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
23	アックシエト1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	西浜町10-206,207,207地先	キナトイシ湾の東岸	10m		伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
24	アックシエト2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	西浜町10-206地先	海岸段丘上	10m		伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
26	幌茂尻東堅穴群	集落跡	縄文	穂香37地	二つの小川に挟まれた舌状の微高地	5m		北地文化研究会1974	
27	ラーナイ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香43,43地先	海岸段丘上	10m		北地文化研究会1974、藤本ほか1980、川上編1985	国史跡
28	ラーナイ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香43,43地先	海岸段丘上	10m		北地文化研究会1974、藤本ほか1980、川上編1985	国史跡
29	東和田1堅穴群	集落跡	不明	東和田70	第一ホニオイ川左岸の台地上	25m			
30	ウエンナイチャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香50,59地先	海岸段丘上	15m		伊藤1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
32	キナトイシ貝塚	貝塚	不明	西浜町10-200~202	海岸段丘上	15m			
33	幌茂尻ポントマリ堅穴群	集落跡	縄文・縄文	穂香57,58,60,62	海岸段丘上	10m		北地文化研究会1974	
34	穂香堅穴群	集落跡	縄文・縄文	穂香172-1,175,185	第二ホニオイ川左岸台地上	10m	○	北地文化研究会1974、川上編1994、(公財)北海道埋蔵文化財センター2002・2003・2004	
35	温根沼チャルコロモイ東堅穴群	集落跡	不明	温根沼2	海岸段丘上	10m		北地文化研究会1974	
36	温根沼チャルコロモイ東墳墓群	墳墓	アイヌ	温根沼2		10m		北地文化研究会1974	
37	チャルコロフィナ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	温根沼2,4,4地先	海岸段丘上	10m		伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
38	チャルコロモイ西堅穴群	集落跡	不明	温根沼4	海岸段丘上	10m		伊藤1935、北地文化研究会1974	
66	弁天島チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	弁天島	弁天島北岸台地上			伊藤1935・1938	
68	ヘニケムイ堅穴群	集落跡	縄文	琴平町1-5	海岸段丘上	10m		北編ほか1963、北地文化研究会1974、澤田ほか2023	
75	穂香2堅穴群	集落跡	不明	穂香99	海岸段丘上	15m			
80	穂香3堅穴群	集落跡	不明	穂香181-1	第二ホニオイ川左岸台地上河口より500m上流	10~20m			
85	ニランケウシ1号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	穂香7,7地先	穂香の海岸段丘上	10m		伊藤1935・1938、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
86	チャルコロフィナ2号チャシ跡	チャシ跡	アイヌ	温根沼4,4地先	温根沼東方、海岸段丘上			伊藤1935・1938、北地文化研究会1974、藤本ほか編1980、川上編1985	国史跡
133	西月ヶ岡川左岸1堅穴群	集落跡	不明	西浜町1-200,1,200-2	西月ヶ岡川左岸段丘上	40m			
147	長節1遺跡	遺物包含地	縄文	長節63,64	海岸段丘上	10m			
148	長節2遺跡	遺物包含地	不明	長節134,139	長節湖北岸台地上	10m			
149	長節3遺跡	遺物包含地	不明	長節137-1,2	長節湖北岸台地上	15m			
150	穂香4遺跡	遺物包含地	不明	穂香37,43	海岸段丘上	10m			
151	穂香5遺跡	遺物包含地	不明	穂香22,23	海岸段丘上	5m			
152	穂香6堅穴群	集落跡	不明	穂香31-3	第二ホニオイ川右岸台地上	20m			
153	穂香7堅穴群	集落跡	不明	穂香92-1,93	西ヶ岡堅穴群と沢を挟んで西側	30m			
155	西浜町1遺跡	遺物包含地	不明	西浜町10-4-2	海岸段丘上	10m			
262	温根沼1遺跡	遺物包含地	縄文	温根沼127-1					
289	花咲岬1遺跡	遺物包含地	縄文	花咲港3-2	海岸の崖の上	5m			
290	トフケナイ遺跡	遺物包含地	縄文	幌茂尻70-1	海岸段丘上	20m			
292	穂香8堅穴群	集落跡	不明	穂香110-1		30m			
295	幌茂尻1遺跡	集落跡	縄文・縄文	幌茂尻140-2	低湿地に面した緩斜面	10m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター2017	
296	穂香川右岸遺跡	集落跡	縄文	穂香150,163	第二ホニオイ川右岸段丘上	7~13m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター2005	
300	キナトイシ遺跡	遺物包含地	アイヌ	西浜町10-213	海岸段丘上の切り通し	10m		猪熊2015	
301	関江谷2堅穴群	集落跡	不明	西和田国有林(1003林班51小班)	温根沼北岸丘陵上	15m			
302	関江谷3堅穴群	集落跡	縄文	西和田国有林(1003林班51小班)	温根沼北岸丘陵上	20~25m			
307	温根沼2遺跡	集落跡	縄文・続縄文・ 縄文・トビニタイ	温根沼271,271地先,285,297,298	温根沼東岸段丘上	10m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター2019	
308	温根沼3遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文・ オホーツク・縄文	温根沼24-1	温根沼東岸段丘及び斜面	15~25m	○	(公財)北海道埋蔵文化財センター2018	
309	温根沼東岸2遺跡	集落跡	縄文・続縄文・縄文	西和田国有林(1003林班お小班)	温根沼東岸東オンネットウ小沢川右岸	15・30m			
310	温根沼東岸3遺跡	集落跡	縄文	西和田国有林(1003林班わ小班)	温根沼東岸東オンネットウ小沢川左岸	30m			
311	温根沼東岸4遺跡	集落跡	縄文	西和田国有林(1003林班わ小班)	温根沼東岸段丘上	35m			
312	温根沼東岸5遺跡	集落跡	縄文・縄文	西和田国有林(1003林班わ小班)	温根沼東岸段丘上	15m			
313	温根沼東岸6遺跡	集落跡	縄文	西和田国有林(1003林班わ小班)	温根沼東岸西和田沢川右岸	10m			

遺跡(295)、温根沼3遺跡(308)、温根沼2遺跡(307)については、国道44号根室道路建設に伴い発掘調査が実施されている。遺跡の種別として集落跡が27か所と多く、チャン跡が11か所ある。根室市内でもチャン跡の分布が集中してみられる地域である。遺跡の時代別でみると、縄文時代14か所、続縄文時代3か所、オホーツク文化3か所、擦文文化15か所、トビニタイ文化1か所、アイヌ文化14か所となっている。

擦文文化の遺跡は、西月ヶ岡竪穴群(4)、関江谷1竪穴群(7)、キナトイシ竪穴群(20)、幌茂尻東竪穴群(26)、幌茂尻ポントマリ竪穴群(33)、穂香竪穴群、幌茂尻1遺跡、関江谷3竪穴群(302)、温根沼2遺跡、温根沼3遺跡、温根沼東岸2～6遺跡(309～313)であり、これまで発掘調査が行われたのは、関江谷1竪穴群、穂香竪穴群、幌茂尻1遺跡、温根沼2遺跡、温根沼3遺跡の5か所である。関江谷1竪穴群では3軒の竪穴住居跡が調査され、うち2軒でカマドが確認されている(児玉ほか1956)。温根沼2遺跡ではカマドを伴う竪穴住居跡が2軒調査されている((公財)北海道埋蔵文化財センター編2019)。幌茂尻1遺跡では3軒の住居跡が調査されているが、カマドを伴っておらず、うち2軒で炉が確認されている。また出土遺物としては刀子が出土している((公財)北海道埋蔵文化財センター編2017)。穂香竪穴群では、1993年の調査で5軒(川上編1994)、2001～2003年の調査では26軒の計31軒の擦文文化後期の竪穴住居跡が発掘されており、カマドや炉を伴う住居跡が検出され、土器のほか刀子、鉤鈷、ガラス玉などが出土している((公財)北海道埋蔵文化財センター編2002・2003・2004)。

(3) 遺跡をとりまく経過

西月ヶ岡竪穴群は昭和初期の伊藤初太郎の調査で分布が確認されており(伊藤1935)、1937年と1940年に長尾又六が史跡指定するよう北海道庁や旧根室町に申請を行っている(大久保2023)。1953年に札幌西高等学校、1963年に東京教育大学(現在の筑波大学)が測量と竪穴の発掘による学術調査を実施している。1967年と1968年には国道44号線が遺跡の北端を切り建設された。1970年頃は根室市の人口がピークを迎えており、宅地や道路等の建設が西月ヶ岡竪穴群の周辺に及ぶようになり、遺跡の保存について議論されるようになった。根室市教育委員会は東京教育大学の調査成果をもとに、国に対し史跡指定についての意見具申を行い、1976年8月22日に西月ヶ岡竪穴群のうち136,876㎡が「西月ヶ岡遺跡」として史跡指定された。1982年には国道44号線の道路改良工事により、指定範囲に隣接する土地で発掘調査が実施された(川上ほか編1983)。1993年には専門家等からなる「史跡西月ヶ岡遺跡保存整備委員会」が設置され、史跡の保存と活用について検討が行われた(根室市教育委員会ほか編1995)。この際に西月ヶ岡竪穴群の測量調査や史跡境界杭の整備も実施された。2020年には日本遺産「「鮭の聖地」の物語」の構成文化財に加えられた。現在は、説明板、誘導板を整備し、草刈り等の環境整備を行い竪穴のくぼみを見せる形で史跡を公開している。

3. 調査の方法

(1) 測量調査

ア. 測量の方法

西月ヶ岡竪穴群は竪穴住居跡がくぼみとなって残っており、踏査や表面観察でも確認できるが、植生が繁茂している部分の竪穴の所在や形状、地形を把握でき、かつ広範囲を迅速に図化できることから、UAVに搭載したレーザーによる計測と図化を行った。

計測にあたりRTK-GNSSによる観測で標定点を遺跡内4か所に設置した。標定点の成果は表2の通りである。標定点の観測、設置後、地図情報レベル500以上でUAVによるレーザー計測を行い、点群データを取得した。計測と合わせてUAVによる全体コース撮影とトータルステーションによる地形の補足測量を行った。

レーザー計測によって得られた点群データは解析処理を行い、樹木等の地物を含むオリジナルデータを作成した。その後、フィルタリング処理を行い、地物を除いた地形データであるグラウンドデータを作成した。ただしグラウンドデータそのままではデータ量が膨大になり扱いにくいいため、最近隣法を用いたグリッドデータを作成しデータを軽量化し、グラウンドデータから作成した陰影起伏図とUAV空撮画像によるオルソ画像を用いて地形測量図を作成した。草地造成等の影響により、竪穴のくぼみが不明瞭な部分については、過去の空撮画像や測量図を参照しながら、現地を確認し竪穴の分布を図化した。また、計測で得られた三次元データをもとにCS立体図を作成し、竪穴のくぼみの広がりを把握した。CS立体図は長野県林業総合センターが考案した地形表現図であり、曲率（Curvature）と傾斜（Slope）との組み合わせにより、緩傾斜地は淡く、急傾斜地は濃く、凸地は赤く、凹地は青く表現され地形判読を容易にするものである。

また、国指定史跡西月ヶ岡遺跡の範囲を示すコンクリート製の史跡境界杭には、日本測地系に基づく座標値が設定されていたが、今回の調査で境界標柱の所在調査を行い、座標値を世界測地系に変換した（表3）。

表2 標定点の座標値

点名	x座標(m)	y座標(m)	対標高	地盤高
01	-74937.324	106074.282	23.001	21.581
02	-75490.295	106353.007	29.779	28.359
03	-75172.276	106298.593	29.875	28.455
04	-75291.134	106185.647	25.392	23.972

表3 史跡西月ヶ岡遺跡の史跡境界杭の座標値

座標系	点名	X座標(m)	Y座標(m)	現状
X III	K.1	-74968.211	106123.079	現存
X III	K.2	-75316.924	106529.112	亡失
X III	K.3	-75412.844	106450.329	現存
X III	K.4	-75531.514	106352.866	現存
X III	K.5	-75359.838	106174.449	現存
X III	K.6	-75350.718	106163.639	現存
X III	K.7	-75327.849	106094.809	現存
X III	K.8	-75240.670	106044.191	現存
X III	K.9	-75105.431	105966.494	現存
X III	K.10	-75005.791	106079.727	現存

イ. 現地調査

レーザー計測で得られた図や過去の空撮、測量図等も参照しながら、西月ヶ岡竪穴群の踏査を行い、竪穴の分布範囲を確認し、現地の竪穴と突き合わせを行い、分布図の補正を行った。あわせて、竪穴の写真撮影を高所撮影ポール（Bi Rod 6G-7500）にデジタルカメラ（オリンパス TOUGH TG-6）を取り付けてリモート撮影を行った。また、一部の竪穴について、LiDARスキャナーが搭載されたスマートフォン（アップルコンピューター iPhone13 pro）と三次元モデル作成アプリケーション Metascanによる計測を行った。

(2) 過去の調査資料の検討

西月ヶ岡竪穴群で調査された遺構や遺物を集成し、調査の概要をまとめた。記録が残る発掘調査は、1953年の札幌西高等学校郷土研究部、1963年の東京教育大学、1982年の根室市教育委員会の調査である。札幌西高等学校郷土研究部の資料は北海道博物館に所蔵されている。東京教育大学の資料は、根室市内で長年に渡り考古学の調査研究をされてきた北構保男氏（1918－2020年）が保管してきた。北構氏保管の考古資料については、2017年に根室市教育委員会に移管された。東京教育大学が調査した西月ヶ岡竪穴群資料も改めて報告書と突き合わせ、内容の確認を行ったほか、国指定史跡西月ヶ岡遺跡の価値を説明する上で重要な内耳土器の図化を行った。さらに、北構氏が西月ヶ岡竪穴群で収集した資料についても図化や写真撮影を行った。

4. 調査の成果

(1) 測量調査の成果

図2に竪穴の分布を示した測量図、図3に史跡指定範囲、過去の発掘調査地点などの情報を入れた図、図4にCS立体図を示した。レーザー計測による測量では竪穴のくぼみが把握され、その数は28か所であった。第一ホニオイ川に接続する無名沢である沢A～沢Eに区画される河岸段丘を段丘1～段丘5に分け、竪穴の分布や地形の特徴を記述する。

ア. 段丘1

国道44号線で切られており、沢Aに沿って竪穴のくぼみが見られる。段丘1はかつて牧草地となっており草地改良の影響からか竪穴の深さが全体的に浅く、形状が不明瞭になっている。沢Aの奥の家屋がある付近にまで竪穴がまばらに広がる。1982年の国道44号線改良工事の際に4軒の竪穴住居跡が発掘調査されている。

イ. 段丘2

沢Aと沢Bで区画された台地の平坦部全体に竪穴が分布し、本遺跡で最も竪穴が集中する部分である。舌状に張り出した段丘先端にあたる標高22mの部分には長軸が10mほどの平面形が方形の大型竪穴がみられ、その付近に長軸6m前後の竪穴があり、緩斜面部分には、長軸5m以下の小型の竪穴が分布する。多くが方形の平面形だが、平面形が長方形の竪穴もみられる。

段丘2の中央付近では北東から南西に土地の境界線が設定されており、現在この境界線で史跡指定範囲が区画されている。指定範囲内にある沢Bに面する竪穴はくぼみが深いものが多いが、境界線から北の、沢Aに至る部分は竪穴の深さが浅く平面形が不明瞭になっている。過去の空撮画像の検討の結果、1952年撮影の空撮画像では、段丘2に分布する竪穴のくぼみは明瞭だが、1978年撮影の空撮画像では、段丘2の北半分にある竪穴のくぼみが不明瞭になっている(図5)。1952年の画像に写っていた排根線が1978年の画像では無くなっていることから、この間に排根線が撤去され周囲に広げられたことによるものと考えられる。この部分については、1994年の根室市教育委員会の測量成果や1952年の空撮を重ねながら外形線を表し、現地で竪穴のくぼみの確認を行った。段丘2には1963年に東京教育大学が調査した7号竪穴と49号竪穴が含まれる。

ウ. 段丘3

沢Bと沢Cで区画された台地の平坦部から第一ホニオイ川に面する緩斜面に平面形が方形の竪穴のくぼみが分布する。第一ホニオイ川に面する緩斜面には長軸5m前後の竪穴が標高9m付近まで分布する。舌状に張り出した台地の先端にあたる標高22mの部分には、1辺が約12m四方の本遺跡で最大級の竪穴がみられる。この竪穴の南西に1辺が約9m四方の竪穴が隣接し、現地調査時に実施したスマートフォンに付属するLiDARによる三次元計測から、竪穴の南東壁にカマドの煙道とみられる細長くくぼみを確認することができた(図6)。段丘3には1963年に東京教育大学が調査した120号竪穴が含まれる。

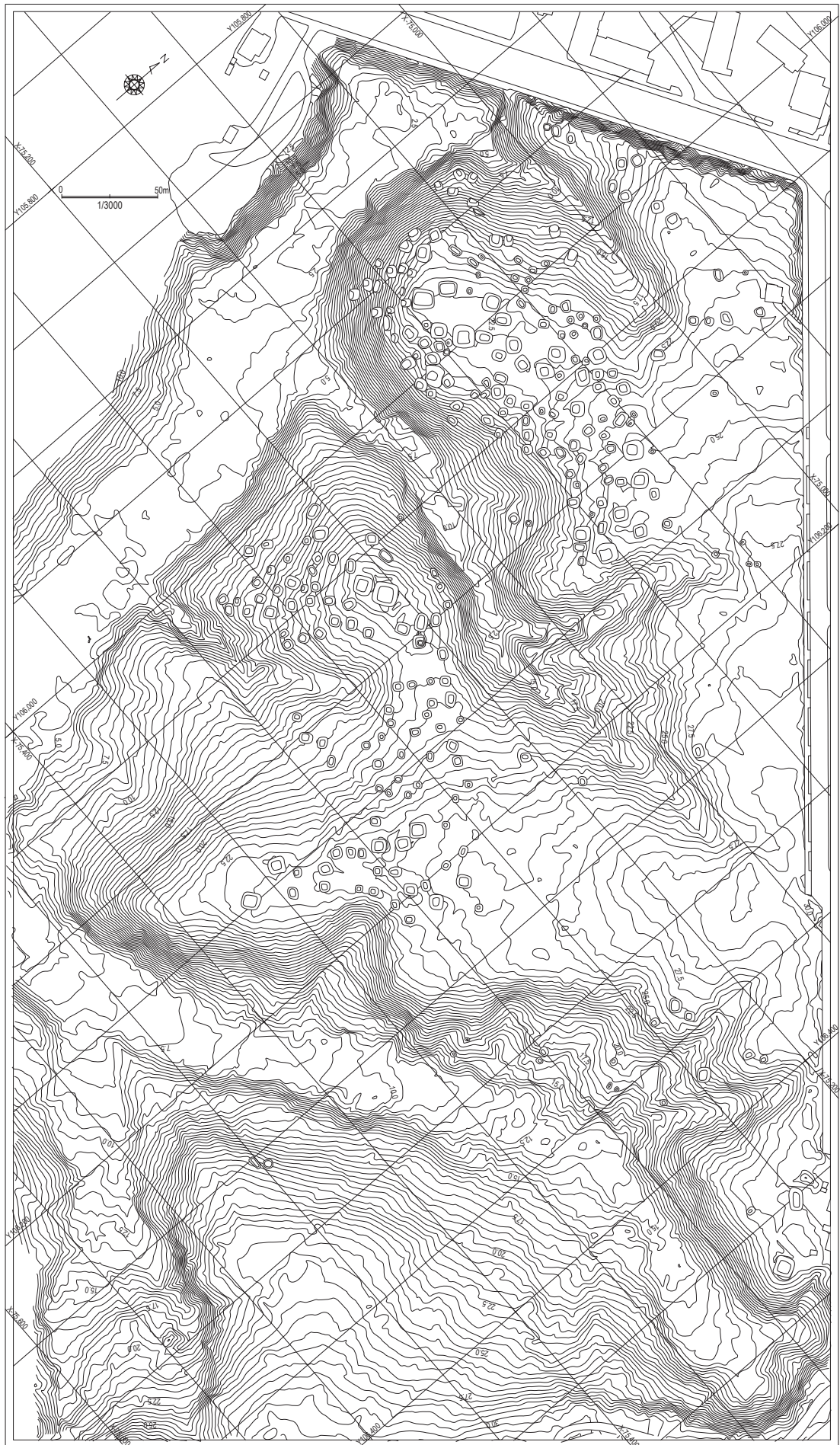


图2 西月ヶ岡竖穴群竖穴分布图

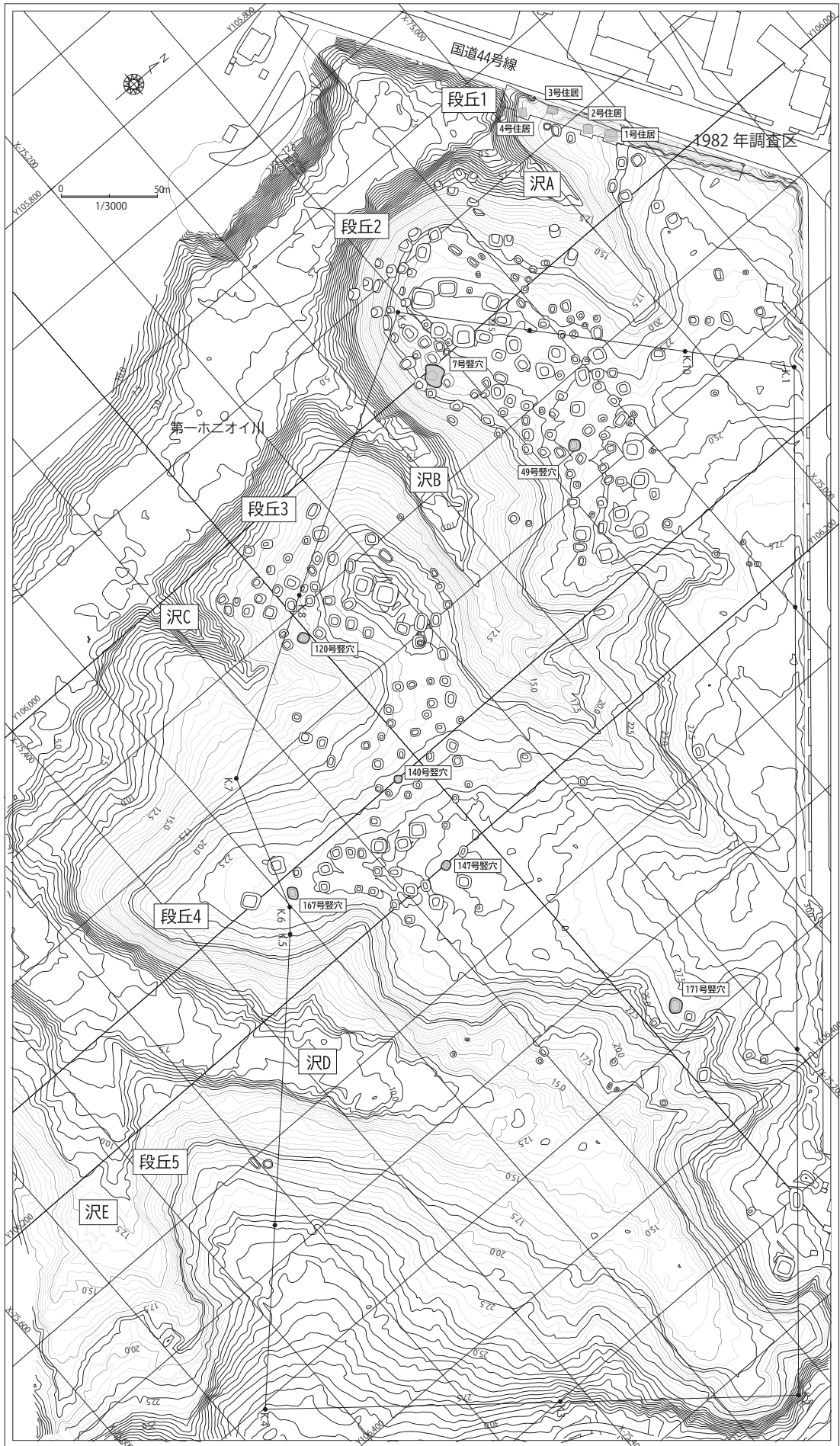


図3 段丘名、沢名、過去の調査地点位置図 (□で囲まれた範囲は史跡指定範囲を示す)

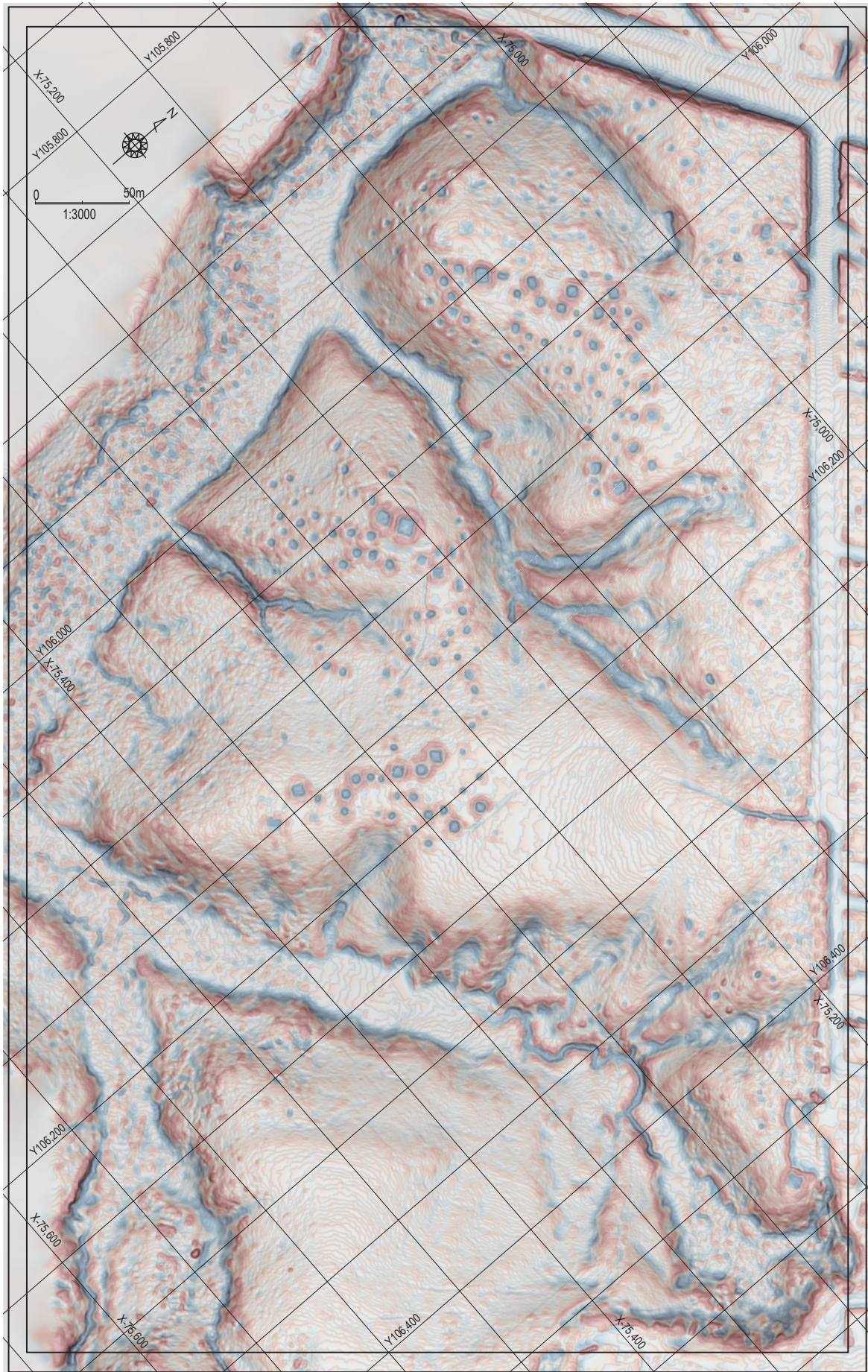


図4 西月ヶ岡竪穴群のCS立体図

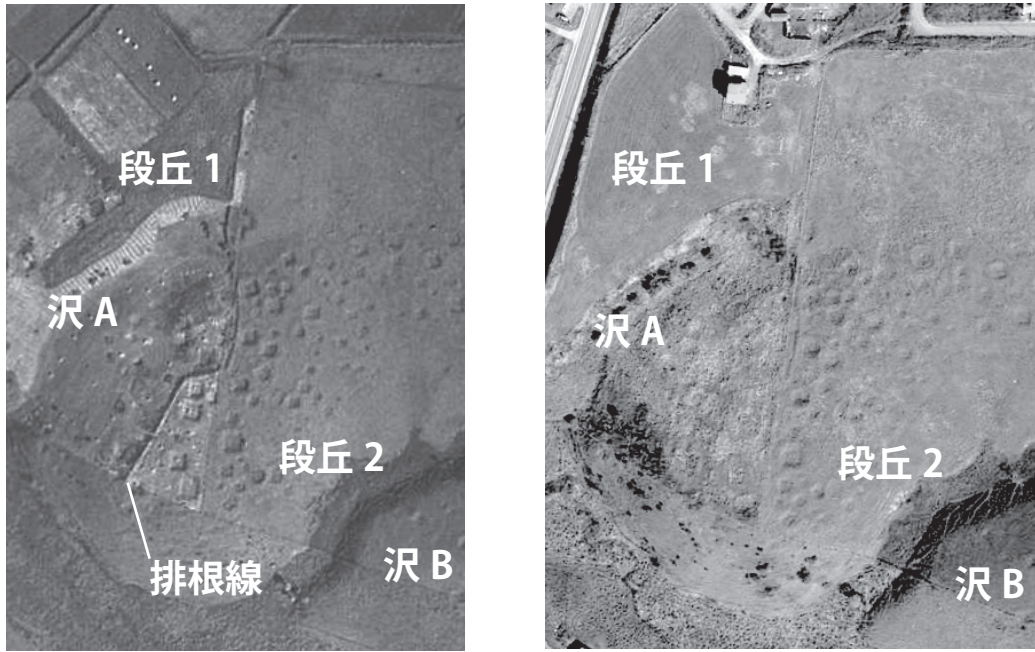


図5 段丘2の過去の空撮比較（左：1952年 右：1978年撮影） 国土地理院発行写真を加筆

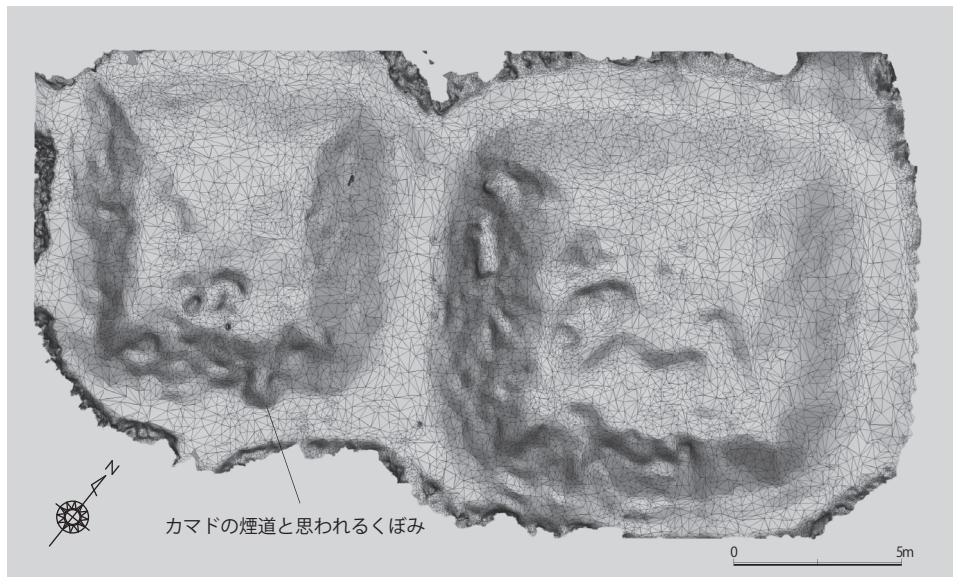
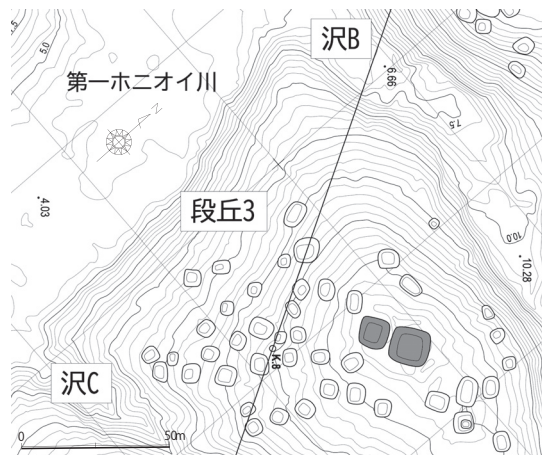


図6 スマートフォンLiDARで計測した竪穴のくぼみと位置



エ. 段丘4

沢Cと沢Dで区画された台地上に平面形が方形の竪穴が分布する。段丘4の北にあたる段丘3への緩斜面には、段丘3から連続して長軸5m前後の方形の竪穴が広がる。段丘縁辺の平坦部に竪穴が集中して分布する。第一ホニオイ川や沢Dに面した緩斜面には竪穴のくぼみは確認できなかった。段丘4には1963年に東京教育大学が調査した140、147号、167号、171号竪穴が含まれる。

オ. 段丘5

沢Dと沢Eで区画された台地であり、台地下で2つの沢が合流している。これまで段丘5では竪穴のくぼみが把握されていなかったが、今回のレーザー計測と現地踏査の結果、竪穴のくぼみが2か所あることがわかった。この台地は、沢Dと沢Eの合流点の方向に緩斜面が続き平坦面がほとんどないためか、段丘1～4に比べて竪穴の数が少ない。

(2) 過去の調査資料

西月ヶ岡竪穴群で行われた発掘調査情報の整理を行う。なお、竪穴住居跡の名称は当時の報告書中の表記に従う。

ア. 札幌西高等学校郷土研究部の調査

調査期間 1953（昭和28）年7月～8月

調査主体 札幌西高等学校郷土研究部

調査概要 西月ヶ岡竪穴群における竪穴の分布調査により、245か所の竪穴のくぼみを把握し、竪穴1か所のトレンチ調査を行っている。

文献 奥野1955、平川ほか編1999

遺構 竪穴

遺物 発掘資料は北海道博物館で保管されており、擦文文化後期の深鉢が文献から3点確認できた。

イ. 北構保男の調査

調査期間 1945（昭和20）年～1963（昭和38）年

調査主体 北構保男

調査概要 個人による試掘調査および資料の収集

文献 なし

遺構 記録なし

遺物（図7-1～3、図版6-1）

根室市在住の考古学者である北構保男氏が収集した資料のうち、西月ヶ岡竪穴群出土資料として、土器2点、石器1点を確認し、図化した。土器が入っていたビニール袋には「根室市西月ヶ岡竪穴戦後初めて調査したので仮にNo.1としておいた この後東京教育大学の調査が行われる（S38年）」と書かれている。石器は土器が入っていたビニール袋とは異なる箱に入っていた。

図7-1は高坏である。口縁部の大部分と脚部を欠いており、坏部は直線的に立ち上がり、口縁部下から屈曲し外に開く。坏部の外面には、脚部を中心に放射状に刻線が付けられ、さらにその上から角度を変えて刻線を重ねた格子目文が施されている。胴部の屈曲部には粗い格子目文が巡る。坏部の底部内面にくぼみがみられる。土器内部に「西月ヶ岡 No.1」の注記がある。擦文文化後期のもの。

図7-2は擦文土器深鉢の胴部破片である。図7-3は砂岩製の磨製石斧で「1963. 10. 30根室西月ヶ岡大関氏畑出土」と注記されている。

ウ. 東京教育大学の調査

調査期間 1963（昭和38）年8月3日～17日

調査主体 東京教育大学文学部史学方法論教室

調査概要 段丘2～段丘4を中心とする測量調査と竪穴住居跡7軒の発掘調査

文献 八幡編1966

遺構（図8）

竪穴住居跡の平面形は隅丸方形で、7号竪穴と120号竪穴では中央に地床炉と南東壁にカマドがつく。49号竪穴では地床炉のみ確認されている。7号、120号、171号竪穴では、住居の構築材が炭化して出土している状況から火災住居跡とされている。炭化材としてヤチダモが多いとされている。

遺物（図7-4、図10、図版5-1・6-2）

7号、49号、120号、140号、147号、171号竪穴では擦文文化後期に位置付けられる深鉢等の土器が出土している。7号竪穴では小型の深鉢に伴い内耳土器が出土している。120号竪穴ではモロコシと考えられる植物遺存体や刀子が出土している。171号竪穴ではフィゴと考えられる土製品が出土している。東京教育大学の調査資料については、遺物を保管してきた北構保男氏より2017年に根室市教育委員会に寄贈されているが、7号竪穴出土の擦文土器3点と内耳土器1点が残されていることが確認された。中でも特徴的な遺物である内耳土器については改めて図化した（図7-4）。内耳土器は土器の内部に煮炊きの際に吊り下げる突起（耳）が2か所つく。底部からやや開きながら直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。外面には縦位のミガキがみられ、下半にススの付着がみられる。底部には、製作時の圧痕か意図的なものか不明だが矢印様の薄い刻線がみられる。

エ. 根室市教育委員会の調査

調査期間 1982（昭和57）年7月11日～9月30日

調査主体 根室市教育委員会

調査概要 一般国道44号の改良工事に伴う竪穴住居跡4軒の発掘調査

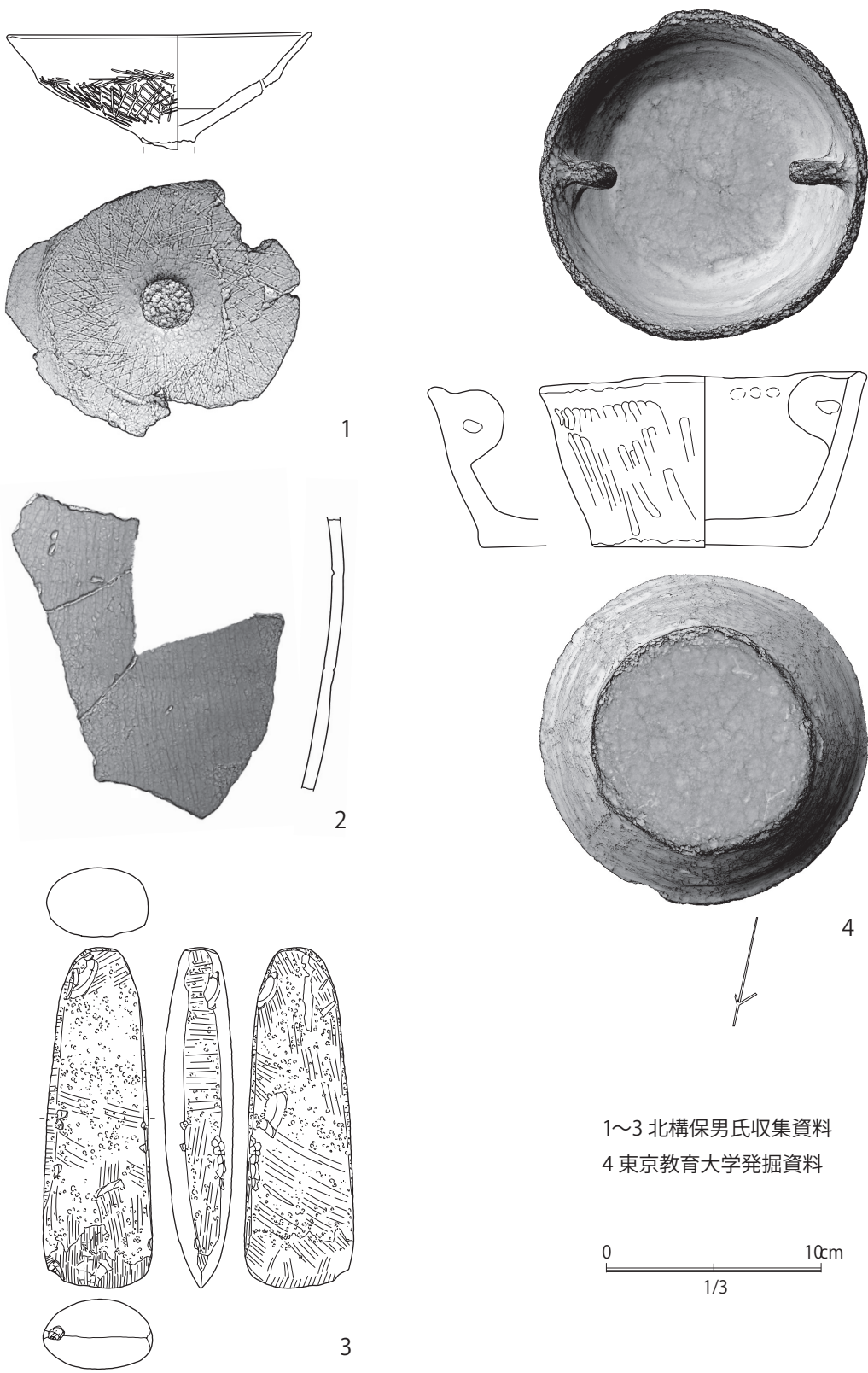
文献 川上ほか編1983

遺構（図9）

竪穴住居跡の平面形は方形で、報告書中で1～4号とした竪穴のうち、1・2・3号住居跡の南東壁にカマドが確認されている。4号住居跡は床面中央に地床炉がみられる。1号住居跡では炭化材がまとまって出土していることから火災住居跡とされており、炭化材の樹種同定からイチイ、トドマツ、エゾマツ、ホオノキ、アサダが竪穴住居の構築材として報告されている。

遺物（図11、図版5-2）

1～4号住居跡において、擦文文化後期に位置付けられる深鉢が出土している。1号住居跡の床面に伴うものとして板状、環状の金属製品の出土が報告されている。



1~3 北構保男氏収集資料
4 東京教育大学発掘資料

図7 遺物実測図

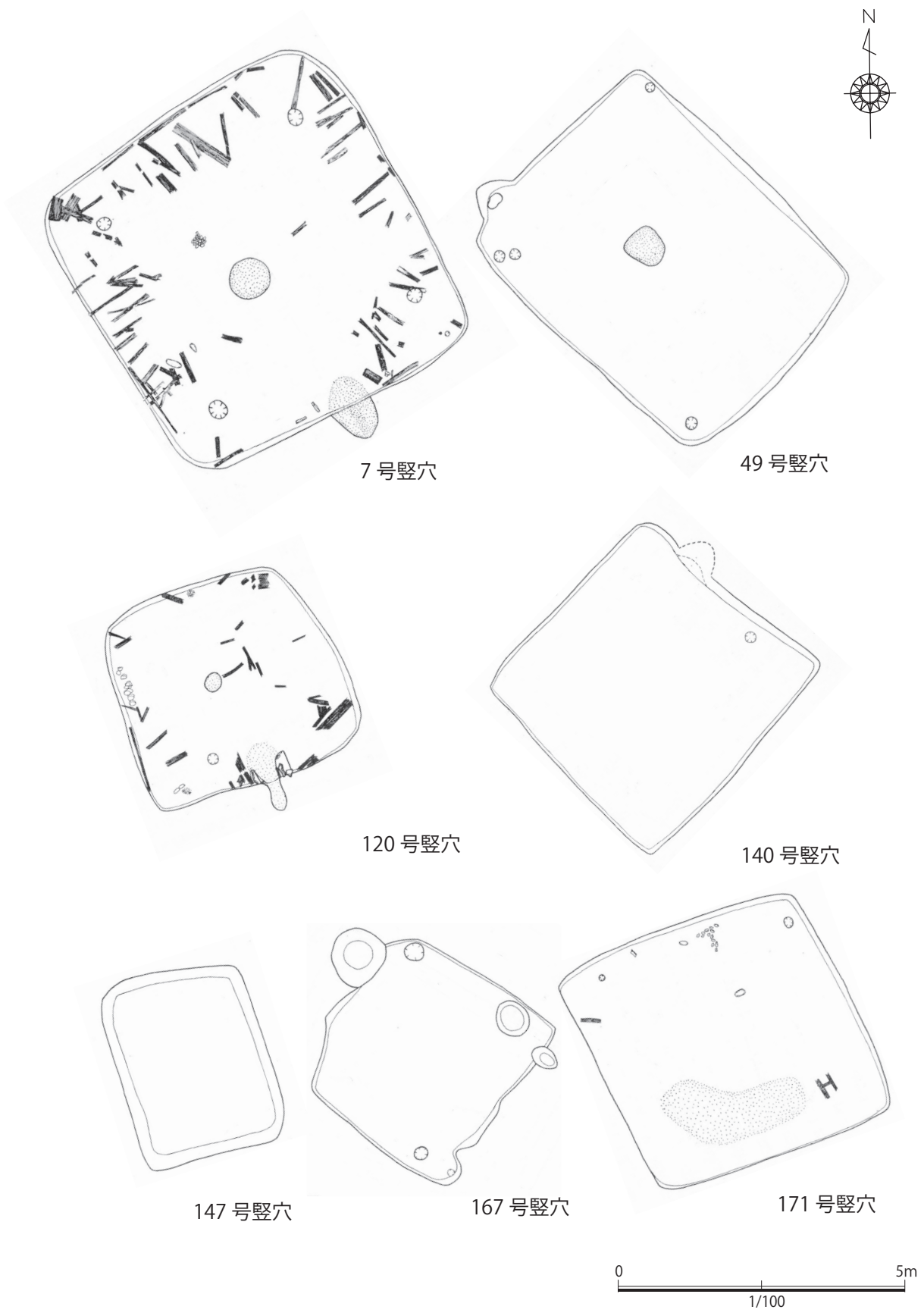


图8 1963年東京教育大学調査竖穴住居跡

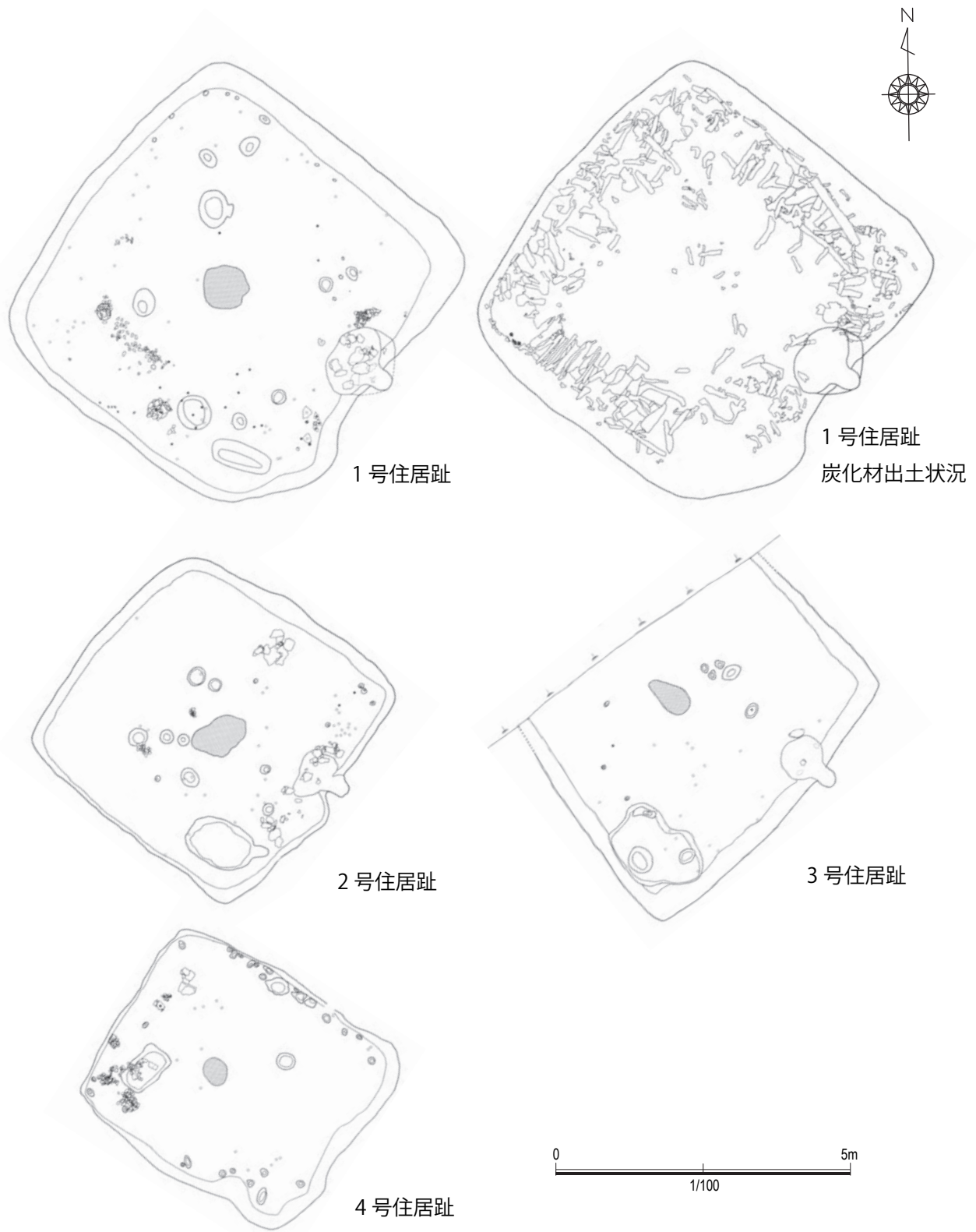


图9 1982年根室市教育委员会调查竖穴住居跡

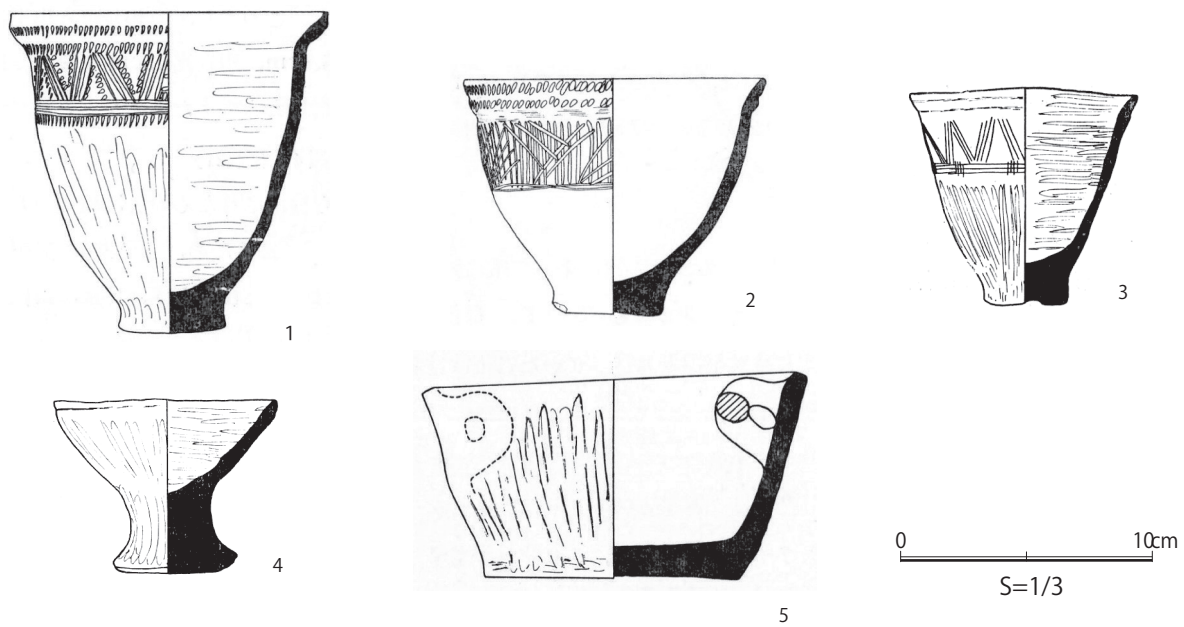


图10 東京教育大学調査 7号竪穴出土土器

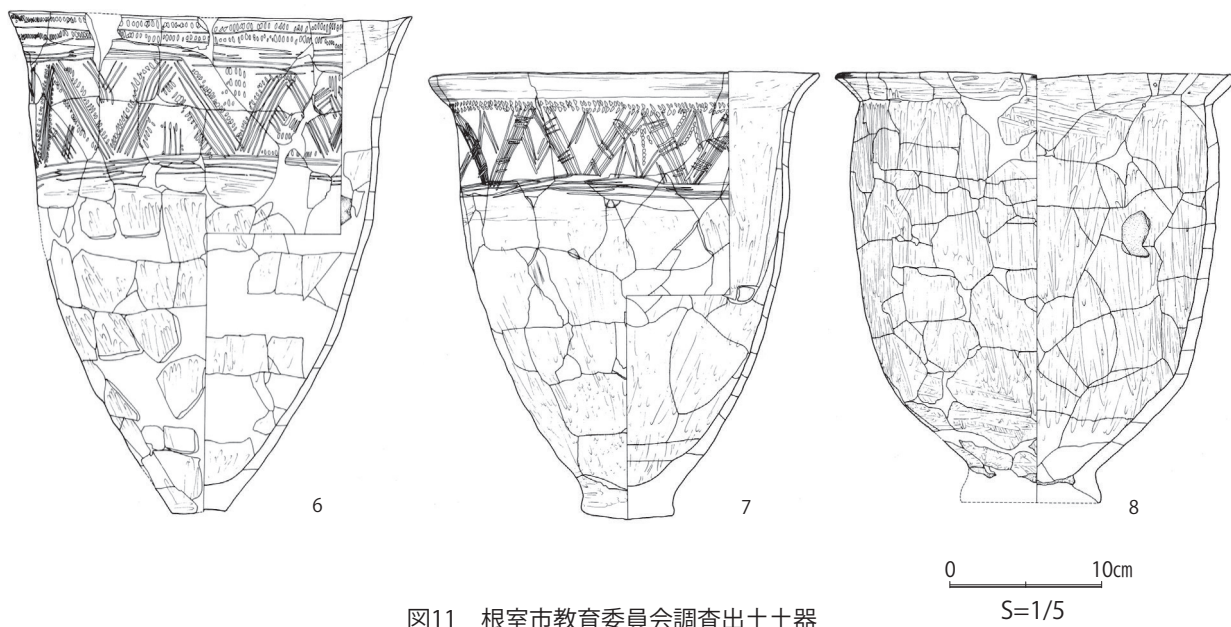


图11 根室市教育委員会調査出土土器

5. まとめ

(1) 遺跡の位置づけ

西月ヶ岡竪穴群では過去に11軒の竪穴住居跡が発掘調査され、出土遺物や平面形から擦文文化後期の竪穴住居跡と考えられている。これらは住居の角を北にして構築されており、カマドが付く竪穴住居跡5軒ではカマドはいずれも南東壁に作られ、一定の規格性が認められる。測量調査の結果、平面形が方形の竪穴で占められていることや、これまでのオホーツク海沿岸の擦文文化集落が、擦文文化後期に位置付けられていることから、西月ヶ岡竪穴群は擦文文化後期を主体とした竪穴群であるといえる。

西月ヶ岡竪穴群は無名沢や第一ホニオイ川に面する台地の縁辺部から台地上の平坦部に向け、竪穴のくぼみが283か所分布していることが明らかになった。史跡指定範囲に隣接する段丘1、段丘2の北半分、段丘3の第一ホニオイ川にかけての緩斜面にも、指定範囲から連続して竪穴のくぼみが広がり、竪穴群を構成していることが確認された。段丘2と段丘3については、台地縁辺の標高の高い場所に長軸10m程度の大型の竪穴があり、周囲にはそれよりも小型の竪穴が広がる。オホーツク総合振興局管内の湧別町川西2遺跡でも同様の配置があり、擦文文化後期における集落形成の一つの傾向とみられる（(公財)北海道埋蔵文化財センター編2019）。

今回の調査から西月ヶ岡竪穴群では、段丘1や段丘2の北半分のように草地造成等により、竪穴のくぼみが浅くなっている竪穴があるものの、大きな地形改変は認められず、遺構や地形については全体的に良好な状態で保存されているとみてよい。

過去の調査から特徴的な遺物として、内耳土器、刀子などの金属製品、雑穀栽培を示唆する植物遺存体があげられる。このうち本州の内耳鉄鍋の模倣品である内耳土器は、1963年の東京教育大学の発掘調査で擦文土器と共伴して出土し注目された。以降、擦文文化後期の竪穴の発掘事例は増えているものの、内耳土器の出土例が増えているわけではなく、依然として西月ヶ岡竪穴群の特徴を示す遺物のひとつといえる。

(2) 西月ヶ岡竪穴群の価値

1994年に策定された「史跡西月ヶ岡遺跡整備事業基本計画」では、考古学、都市計画、景観デザインの専門家からなる保存整備委員会の指導のもと史跡西月ヶ岡遺跡の特色と性格について次の6項目にまとめられ、遺跡の価値づけがなされている。

1. 地形と往時の面影

遺跡の東側隣接地には住宅地域が広がってきているが、遺跡内の地形は良く残されている。周辺の自然環境も良く保全されており、景観上も往時の面影をとどめていると思われる遺跡である。

2. 地表から観察できる擦文時代の集落跡

地表面から観察できる擦文時代の集落跡として、保存状態が良好であり、肉眼で観察できる竪穴群としては世界有数である。

3. 本州との文化交流

土器や鉄器等出土遺物より本州と北海道、千島との文化交流を示唆するものとして、考古学的にも注目されている遺跡である。

4. 擦文文化の解明

モロコシやファイゴが発見され擦文文化の農耕、鉄製造を解明できる遺跡として貴重である。

5. 擦文文化期からアイヌ文化期への移行

擦文時代の後期から終末期の集落と考えられ、アイヌ文化期への移行過程を究明するための貴重な遺跡である。また、内耳土器の発見は、北海道・千島・樺太との関係や、アイヌ文化期への移行過程を研究する重要な物である。

6. 街づくりの拠点

良好な環境を保ちながら市街地から近距離にあり、根室市が進めている文化財を活用した街づくりの拠点となる遺跡である。

史跡西月ヶ岡遺跡から竪穴のくぼみが広がる隣接地においても、過去の発掘調査や現況から1・2・3・6の項目に該当する特徴がみられる。計画では、保存と活用を積極的に行う上で、この隣接地について追加の史跡指定が予定されているとあることから史跡西月ヶ岡遺跡と同等の価値を有すると判断される。

(3) レーザー計測による竪穴の把握について

今回の調査ではUAVによるレーザー計測によって点群データを取得し、遺跡測量図を作成した。また、CS立体図にすることで、等高線では表現しにくい微地形の情報を得ることができ、竪穴のくぼみの広がりをつかえられることができた。北海道北部や東部には、西月ヶ岡竪穴群と同様に竪穴のくぼみが地表から確認できる竪穴群が多く所在する。竪穴のくぼみが数百か所に上る大規模な遺跡があるのに加えて、容易に伐木ができない保護林内に遺跡が所在する場合や調査時に熊害の危険性もあるといった調査上の支障もあり、従来の地上測量調査では竪穴の図化が進みにくい。

UAVによるレーザー計測では、広範囲の測量が比較的短期間の現場作業で済み、春先や晩秋にあたる下草や木々の葉が少ない時期を選べば、植生があっても竪穴のくぼみの記録が可能である。遺跡の点群データの取得は、地震等による災害や経年による地形変化が認められた際に、その規模や影響を判断する上でも有効な情報となりうる。

また、スマートフォンに付属するLiDARによる竪穴計測では、カマドの存在を示唆する微地形をとらえることができた。竪穴のくぼみをレーザー計測することで、現況記録を三次元で得ることができ、カマド等の遺構の予測も可能であることが確認できた。今回、約10mの四方の竪穴のくぼみ2か所を含む約300㎡の範囲について、計測に要した時間は10分足らずであった。ある程度の草刈りがなされていることが前提だが、作業量に比し、得られる情報の大きさを認識することができた。今後の市内における竪穴調査においても、竪穴のくぼみを評価する上で調査手法の一つとして試行していきたいと考える。

(4) 今後の課題

西月ヶ岡竪穴群では国指定史跡西月ヶ岡遺跡から連続して竪穴のくぼみが隣接地に分布し、まとまりを形成しているが、同じ埋蔵文化財包蔵地内で取り扱いが異なる状況にある。近年、根室市内では再生可能エネルギー発電所の建設が増加していることから、史跡西月ヶ岡遺跡の隣接地についても保護の具体的な方策について検討する必要がある。また、竪穴住居跡出土の炭化材にみられる樹木は、第一ホニオイ川の河畔林を利用したと考えられ、もともとの河川名であったアイヌ語地名も植物利用

を示唆する意味であることから、河川周辺も生業の場として捉える必要があり、河川地の取り扱いの検討や植生の把握が重要である。史跡の保存活用に向けた取り組みについては、前回の整備計画から30年が経過し、社会情勢の変化から計画通りに進んでいない。その間、発掘事例の増加や調査研究は進展していることから、今日的な視点で改めて史跡をとりまく環境や本質的価値を捉えなおし、保存活用につなげる必要があると考える。

参考文献

論文・論考・書籍等

永田方正1908「根室郡」『北海道蝦夷語地名解 再版』北海道庁、347～350頁

平光吾一1929「千島及び辨天島出土土器破片に就て（一）」『人類学雑誌』44巻4号、131～144頁

平光吾一1929「千島及び辨天島出土土器破片に就て（二）」『人類学雑誌』44巻5号、192～200頁

平光吾一1929「千島及び辨天島出土土器破片に就て（三）」『人類学雑誌』44巻7号、384～389頁

伊藤初太郎1935「考古学上の根室の遺物と遺跡」森田金蔵、4頁

伊藤初太郎1938「根室半島部に存在せるチャシ」『考古学雑誌』28巻7号56～65頁

奥野清介1955「根室西月ヶ丘と根室周辺調査記」『郷土の今昔』7、札幌西高等学校郷土研究部、15～16頁

児玉作左衛門、大場利夫1956「根室国温根沼遺跡の発掘について—温根沼式押型文遺跡—」

『北方文化研究報告』第11輯、北海道大学、75～145頁

北構保男、沢四郎1963「根室市ベニケムイ出土の早期縄文土器」『釧路の古代文化』第5輯、釧路考古学研究会、14～16頁

湊正雄、加藤誠、熊野純男、箕浦名知男、岡田昭明、田沢純一、新川公1975『根室市の地盤と地質 北海道における特異地盤に対する地震緊急対策に関する研究報告書』北海道、2頁

藤本英夫、名嘉正八郎編1980『日本城郭大系 第1巻 北海道・沖縄』新人物往来社、68～77頁

川上淳編1985『根室半島チャシ跡群環境整備事業報告書』根室市教育委員会

根室市教育委員会、歴史環境計画研究所編1995『史跡西月ヶ岡遺跡整備事業基本計画』根室市教育委員会

平川善祥、右代啓視、為岡進編1999『札幌西高等学校郷土研究部・奥野清介氏資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録；第33集』

猪熊樹人、新美倫子2007「根室市内埋蔵文化財測量調査概要」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第21号、73～81頁

新美倫子、猪熊樹人、大谷茂之、蜂須賀敦子、加藤幹樹2010「根室市関江谷1 竪穴群詳細調査報告Ⅰ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第22号、37～49頁

新美倫子、大谷茂之、蜂須賀敦子、猪熊樹人2011「根室市関江谷1 竪穴群詳細調査報告Ⅱ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第23号、85～91頁

新美倫子、猪熊樹人、大谷茂之、蜂須賀敦子2012「根室市関江谷1 竪穴群詳細調査報告Ⅲ」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第24号、65～77頁

猪熊樹人2015「キナトイシ遺跡のアイヌ文化期資料について（1999・2002年採集分）」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第27号、21～28頁

根室地名研究会編2015『根室市の地名－地名と地域の歴史－』186頁

大久保太智2023「西月ヶ岡遺跡の保護と調査について」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第35号、17～36頁

澤田恭平、猪熊樹人2023「根室市ベニケムイ竪穴群出土の亀ヶ岡式土器について－北構コレクション資料－」『根室市歴史と自然の資料館紀要』第35号、37～40頁

埋蔵文化財調査報告書

八幡一郎編1966「弁天島遺跡」『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会、3～51頁

八幡一郎編1966「西月ヶ岡遺跡」『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会、55～106頁

北地文化研究会1968「根室市弁天島西貝塚竪穴調査概報－1968年度－」『考古学雑誌』54巻2号、49～64頁

北地文化研究会1974『根室市域分布調査報告書』

北地文化研究会1979「根室市弁天島西貝塚竪穴調査報告」『北海道考古学 米村善男衛翁米壽記念号』第15輯、北海道考古学、35～51頁

川上淳、河野本道編1983『根室市西月ヶ岡遺跡発掘調査報告書』根室市教育委員会

川上淳編1994『穂香竪穴群発掘調査報告書』根室市教育委員会

西本豊弘編2003「根室市弁天島遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』第107集、1～71頁

北地文化研究会2009『根室市弁天島遺跡14号竪穴の調査－オホーツク文化期貼付浮文期の大型住居跡－』

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2002『穂香竪穴群(1)』北埋調報170

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2003『穂香竪穴群(2)』北埋調報184

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2004『穂香竪穴群(3)』北埋調報198

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2005『穂香川右岸遺跡』北埋調報212

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2017『幌茂尻1遺跡』北埋調報340

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2018『温根沼3遺跡』北埋調報342

(公財)北海道埋蔵文化財センター編2019『温根沼2遺跡』北埋調報354

表4 発掘竪穴住居跡一覧

図No.	調査年	調査機関	遺構名	位置	平面形	規模 (m)		炉	カマド	住居に伴う遺物	備考
						長軸	短軸				
図8	1963年	東京教育大学	第7号竪穴	段丘2	方形	6.0	5.6	○	○	擦文土器、内耳土器、刀子	火災住居
			第49号竪穴	段丘2	長方形	5.2	4.2	○	×	擦文土器	
			第120号竪穴	段丘3	台形	3.7	3.3	○	○	鉄製刀子、植物遺存体	火災住居
			第140号竪穴	段丘4	不整形	4.5	4.0	×	×	なし	
			第147号竪穴	段丘4	長方形	3.3	2.5	×	×	なし	
			第167号竪穴	段丘4	不整形	3.3	3.0	×	×	なし	
図9	1982年	根室市教育委員会	第1号住居址	段丘1	方形	5.8	5.5	○	○	擦文土器、小管状土製品、皿状木製品、小環状鉄製品、板状鉄製品	火災住居、隅穴
			第2号住居址	段丘1	方形	4.6	4.2	○	○	擦文土器	隅穴
			第3号住居址	段丘1	方形	5.5	(3.2)	○	○	擦文土器、錐先状鉄製品	隅穴
			第4号住居址	段丘1	長方形	4.3	3.3	○	×	擦文土器	隅穴、覆土より縄文晩期土器

表5 土器観察表

(cm)

図	番号	器種	時期	残存部位	胎土	焼成	口径	底径	
7	1	高坏	擦文文化後期	坏部	砂粒含む	良好	14.1	2.5	
外面				内面			その他	器高	器厚
文様		調整		調整				5.3	0.6
斜位沈線の組み合わせ			口縁部 横ミガキ 胴部 横ナデ	口縁部 横ナデ 胴部 横ミガキ		内面2/3が黒変	底径は脚部径 器厚は胴部の最大値		

図	番号	器種	時期	残存部位	胎土	焼成	口径	底径	
7	2	深鉢	擦文文化	胴部	砂粒含む	良好	—	—	
外面				内面			その他	器高	器厚
文様		調整		調整				—	0.6
			横ナデ→縦ミガキ	縦ミガキ		内面、外面とも炭化物付着			

図	番号	器種	時期	残存部位	胎土	焼成	口径	底径	
7	4	内耳土器	擦文文化後期	完形	砂粒多く含む	良好	15.3	10.2	
外面				内面			その他	器高	器厚
文様		調整		調整				8.2	1.0
			口縁部 横ミガキ 胴部 横ナデ→縦ミガキ 底部 ナデ	口縁部～胴部上半 横ナデ 胴部下半 横ミガキ、一部 縦ミガキ 底部 ナデ		外面下半に炭化物付着	器厚は胴部の最大値		

表6 石器観察表

図	番号	器種	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石材
7	3	磨製石斧	15.8×5.1×3.3	397.3	砂岩



1 段丘1、段丘2遠景 南東から



2 段丘1、段丘2遠景 南西から

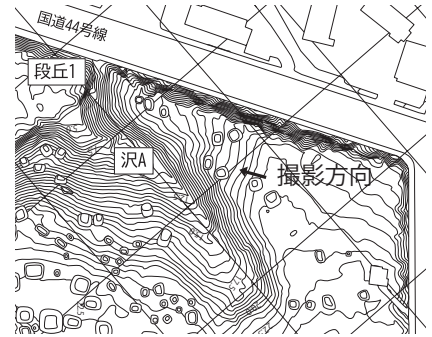


1 段丘 3、段丘 4 遠景 南西から

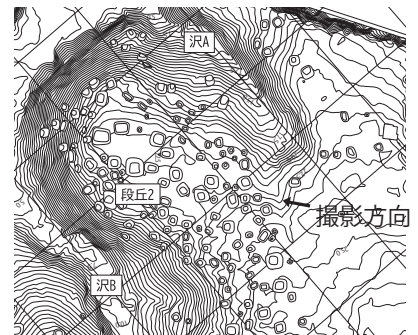


2 段丘 5 遠景 西から

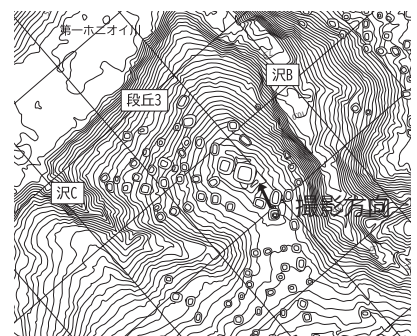
図版 3



1 段丘1 縦穴 北東から

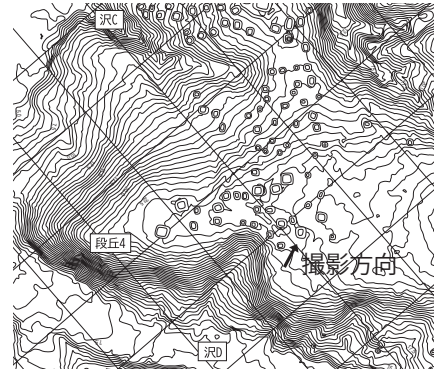


2 段丘2 縦穴 北東から

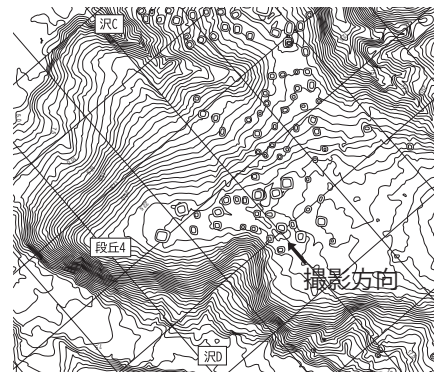


3 段丘3 縦穴 南東から

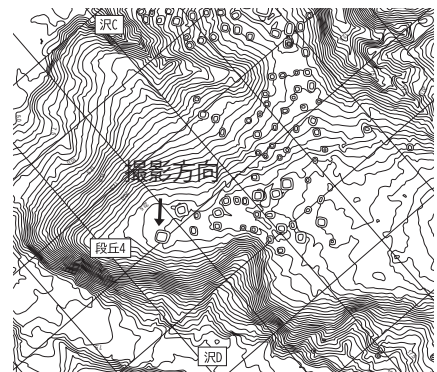
図版 4



1 段丘4 竖穴 南から



2 段丘4 竖穴 東から



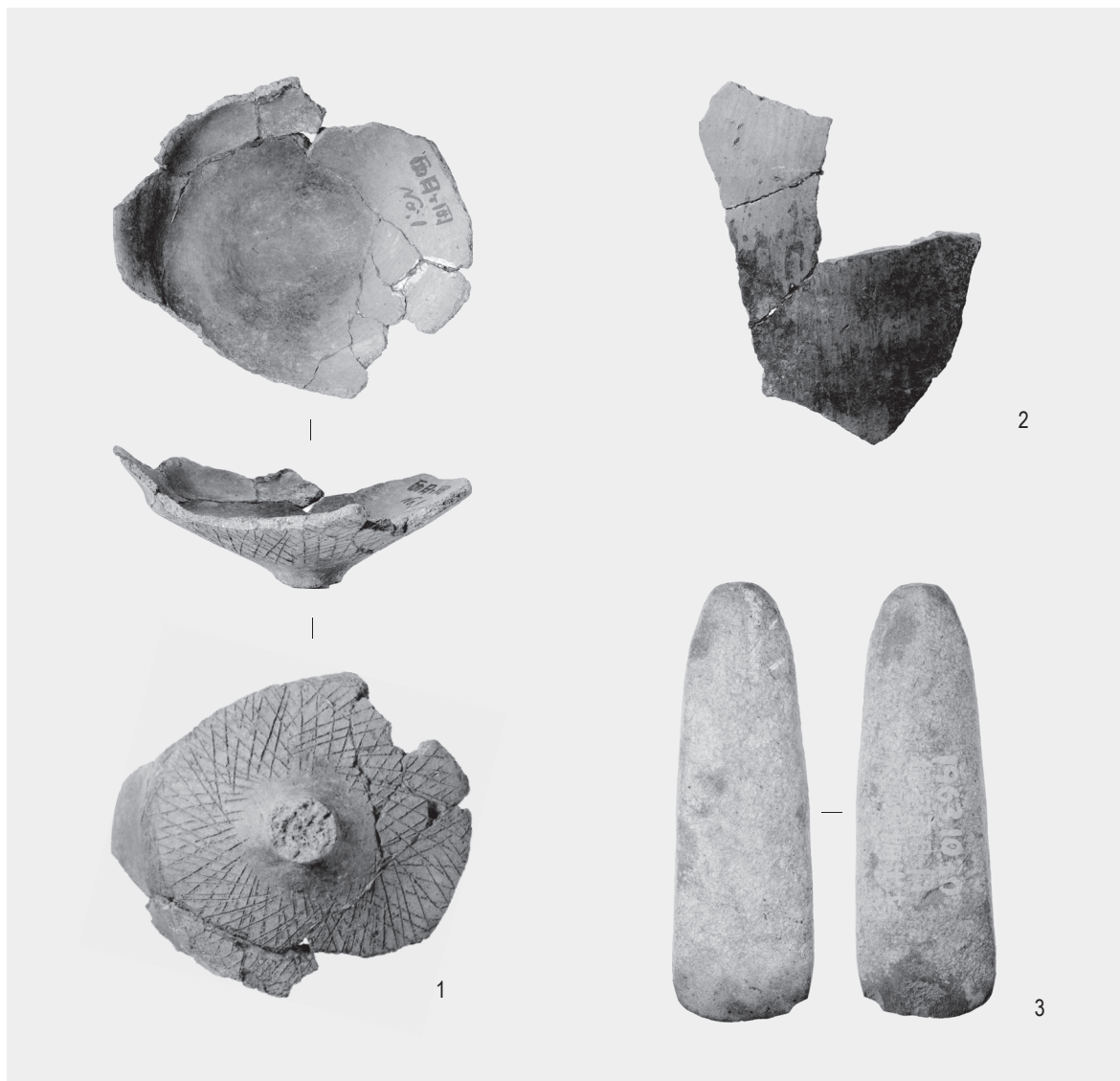
3 段丘4 竖穴 北西から



1 1963年東京教育大学調査7号竪穴出土土器



2 1982年根室市教育委員会調査出土土器



1 北構保男氏収集資料



2 1963年東京教育大学調査
7号竪穴出土内耳土器

報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうねむろし にしつきがおかたてあなぐん							
書名	北海道根室市 西月ヶ岡竪穴群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市内遺跡調査報告書							
シリーズ番号	1							
編著者名	猪熊樹人、大久保太智							
編集機関	根室市教育委員会							
所在地	〒087-0032 北海道根室市花咲港209 根室市歴史と自然の資料館 TEL0153-25-3661							
発行年月日	西暦2024年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西月ヶ岡 竪穴群	北海道根室市 西浜町3丁目87-4、 375-1	01223	N-01-4	43° 18' 59.3608"	145° 33' 23.0306"	2023 0404 ～ 2023 1227	約213,300㎡	詳細分布 調査
	西浜町4丁目136-1 西浜町6丁目2-3、3-1、 4-1、4-2、5-1、5-2、 8-1、9、10-1、 11の一部							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西月ヶ岡 竪穴群	集落跡	擦文文化	竪穴のくぼみ	関連資料調査遺物 擦文土器	5か所の河岸段丘上に平面形が方形のものを中心とした竪穴のくぼみ283か所			
要約	<p>西月ヶ岡竪穴群はオホーツク海に流入する第一ホニオイ川右岸の河岸段丘上に広がり、第一ホニオイ川に接続する無名沢により区画された5つの段丘上に竪穴のくぼみが分布する。このうち136,876㎡が1976年に国指定史跡西月ヶ岡遺跡として指定されている。これまで11軒の竪穴住居跡が発掘されており、いずれも擦文文化後期のものであることから、擦文文化後期を中心とする集落跡であると考えられる。</p> <p>本調査では西月ヶ岡竪穴群の竪穴のくぼみの広がりや現況地形を把握することを目的に、UAVに搭載したレーザーによる計測と図化を行い、現地踏査を行った。その結果、竪穴のくぼみが283か所あり、史跡指定範囲の隣接地にも連続して広がることが確認された。あわせて過去の調査で発掘された遺構・遺物の集成、図化を行った。調査成果を過去の史跡整備計画に掲載された史跡の価値付けと照らし、指定範囲の隣接地に広がる竪穴も史跡内の竪穴と一連のものであり、同等の価値を有するとした。</p>							

市内遺跡調査報告書 1

北海道根室市 西月ヶ岡竪穴群

発行日 令和6(2024)年3月26日
編集・発行 根室市教育委員会
〒087-0032 北海道根室市花咲港209
根室市歴史と自然の資料館
Tel/fax 0153-25-3661
印刷 根室印刷株式会社
